

# 「権義」小考

蘭 部 千 鶴

はじめに

幕末から明治のはじめにかけて、新しく入って来た西洋思想を取り入れるよう努力した知識人の苦心は、並々ならぬものであった。その中でも、特に訳語の定め方の問題は大きかったと思う。

小稿の目的は「権義」「通義」の二つのことについて、現代の辞書に記載されていない意味で幕末から明治のはじめにかけて使われた例を、報告することにある。

## 一 「権義」

まず「権義」は、辞書に次のように記載されている。

### 1 『諸橋大漢和辞典』

○権と義。手段は常道に反しても結果が道に適ふを権といひ、正義を義といふ。〔文中子、魏相〕権義挙而皇極立

矣。

○權利と義務。

### 2 『日本国語大辞典』

權利と義務。\*万国公法△西周訳ⅴ一、一「慣行の公法とは△略ⅴ互に礼義(注1)を以て相交る各国の交際権義を論ずる学派を指すなり」\*文明論之概略△福沢諭吉ⅴ一、三「行かんと欲すれば行き、止らんと欲すれば止まりて各人其権義を異にすることなし」

### 3 『広辞苑・第二版』：記載なし

これらからは、「権義」は「權利と義務」の意味となる。

そこで次に、実際に使われた例として、『明六雑誌』から用例を拾うと、次の六例のみである。

但し、傍点は筆者が付けたものであり、「ㄱ」「ㄴ」「ㄷ」はそれぞれ「コト」「ドモ」「トキ」と改めた。そのほか印刷の便

を図って、字体も現在通行の形にした。

4 独立国権義（森有礼第七号一オ）

5 初メ我邦外交ヲ開クヤ實際不便少カラス是ニ於テ外人ノ請求  
ニ応ジ我邦外人ヲ管理保護スルノ権義及ヒ開市地ヲ制治シ輸出  
入物品税港税灯明税等ヲ課スルノ権理半ハ彼ニ放与セリ（森七  
号一ウ）

6 之ヲ法律ノ語ニテ權利ト云ヒ又他人ノ三大宝ヲ貴重シ我ノ三  
惡魔ヲ制シ毫モ之ヲ犯スコトナキ之ヲ義務ト謂フ此如ク権義  
相立チ其間ニ於テ苟モ犯スコトナケレハ人道ノ大本立チ德行ノ  
基礎備ハル（西周三十九号二ウ）

7 即チ是道義ニシテ前ノ権義ト相混同ス可ラス（西三十九号三  
オ）

8 京外ノ民固ヨリ此義務ヲ負ズ該区ノ民固ヨリ此特権ヲ有セズ  
乃該区独此特権ヲ有セザルノミナラス当時之ヲ欲セス啻ニ之ヲ  
欲セザルノミナラス当時該区民ノ苦情ヲ鳴ラス声街衢ニ満テリ  
然リ而シテ政府人民ノ権義ヲ問ス（津田真道十一号四オ）

9 譬バ民法ノ規則ニ於テ人権物権契約ノ権義ヲ掲載シタル條款  
ヲ見ルニ絶テ男女ニ就テ其権限ヲ異ニシ差等ヲ設ケタルコトア  
ルコトナシ（津田三十五号八オ）

これらの例はいずれも、「權利及び義務」または「權利或いは義

務」の意味であると考えられる。更に、西周については、『百一新論』からも九例が得られた。

10 箇様ナ訳デ権義トイフコト人二人リ対スレハ互ニ生スルコト  
デ譬ヘハ今質ヲ置ク人アレハ置ク方ノ人ト取ル方ノ人トニ就テ  
権義アリ（下十四ウ）

11 又今画工ニ画ヲ頼ム人ガアツテ画工之ヲ肯シタ時ニハ直ニ権  
義ガ二人ノ間ニ出来テ頼ム人ニハ約シタ期迄ニ其画ヲ書カシテ  
取ルヘキノ権アリ其代リ其出来ノ上ハ謝物ヲ償フヘキ義アリ  
（下十五オ）

12 総テ人間ノ交際ニ何一ツ権義ノ考ノナイ事ハナイコトデ枚挙  
ス可ラサルコトデゴザルガ（下十五ウ）

13 夫故ニ此権義ト云フモノ人ノ性上ニ備ハル自愛自立ノ心ト相  
和シテ人々己ガ権ノ在ル所ヲ重ンジ之ヲ失フコトナク是ニ対シ  
テ人ノ自愛自立ノ心ヲモ恕シテ人ニ対スルノ義ヲモ重ンジ互ニ  
相抵当シテ寸分ノ余地ヲモ残スコトナシ（下十五ウ）

14 然シ余リニ自愛自立ノ心ガ角リテ権ヲ争フコトガ盛ナル時ハ  
人ノ自愛自立ノ権ヲモ蔑却シテ遂ニ権ヲ犯シ義ヲ破リ権義ノ大  
和ヲ破ルニ至ルデゴザル（下十五ウ）

15 カハル蔽ヲ救フ為ニ教トイフモノガゴザツテ権ヲ張ル方ノ心  
ヲ抑ヘ義ヲ重ンスル方ノ心ヲ勉メテ権義ノ大和ヲ破ラシメザル

様ニ致スデゴザル(下十六オ)

16 又其上ニ人間ハ虎狼ノ如ク独居独栖ノ出来ルモノデナク矢張  
鴻雁牛羊ナド、同シク為群ノ性アレハ必ス相生養ノ道ガ起ラネ  
バナラズ相生養ノ道ハ夫婦トイフモノニ始マリ父子トイフモノ  
ニ半ハシ君民政府トイフモノニ成リテ是ヨリ以往百般ノ行事ニ  
皆ナ右ノ權、義、仁愛ノ理ガ流行シテ古ヨリ今マデ此世界デハ瞬間  
デモ熄ムコトハナイデゴザル(下二十九オ)

17 其レハ其姦臣ト云フモノ其名分ヲ犯シタリ權ヲ擅マ、ニシタ  
リスル処ハ如何ニモ前ニ謂ツタ權、義ノ度ヲ犯シタ者ナレドモ  
(下三十ウ)

これらも同様に、「權利及び義務」または「權利或いは義務」の  
意味であると考えられる。

ところで、福沢諭吉は『学問ノス、メ』二編で、「權理通義」  
ということばを使っている。

18 故ニ今人ト人トノ鈞合ヲ問ヘバコレヲ同等ト云ハザルヲ得ズ  
但シ其同等トハ有様ノ等シキヲ云フニ非ズ權理通義ノ等シキヲ  
云フナリ(三ウ)

19 又一方ヨリ見テ其人々持前ノ權理通義ヲ以テ論ズルトキハ如  
何ニモ同等ニシテ一厘一毛ノ輕重アルコトナシ(四オ)

20 即チ其權理通義トハ人々其命ヲ重ンジ其身代所持ノ物ヲ守リ

其面目名誉ヲ大切ニスルノ大義ナリ(四ウ)

21 世ノ惡シキ諺ニ泣ク子ト地頭ニハ叶ハズト又云ク親ト主人ハ  
無理ヲ云フモノナド、テ或ハ人ノ權理通義ヲモ枉ク可キモノノ  
ヤウ唱ル者アレドモコハ有様ト權理通義ヲ取違ヘタル論ナリ(四ウ)

22 幕府ハ勿論三百諸侯ノ領分ニモ各小政府ヲ立テ、百姓町人ヲ  
勝手次第ニ取扱ヒ或ハ慈非ニ似タルコトアルモ其實ハ人ニ持前  
ノ權理通義ヲ許スコトナクシテ実ニ見ルニ忍ビザルコト多シ  
(六ウ)

23 双方既ニ其職分ヲ尽シテ約束ヲ違フルコトナキ上ハ更ニ何等  
ノ申分モアル可ラズ各其權理通義ヲ逞フシテ少シモ妨ヲ為スノ  
理ナシ(七ウ)

24 スル惡風俗ノ起リシ由縁ヲ尋ルニ其本ハ人間同等ノ大趣意ヲ  
誤リテ貧富強弱ノ有様ヲ惡シキ道具ニ用ヒ政府富強ノ勢ヲ以テ  
貧弱ナル人民ノ權理通義ヲ妨ルノ場合ニ至リタルナリ(九オ)  
そして、三編のはじめに、次のように但し書をつけている。

25 二編ニアル權理通義ノ四字ヲ略シテコ、ニハ唯權義ト記シタ  
リ何レモ英語ノ「ライト」ト云フ字ニ当ル(一オ)

このように、福沢は「權理通義」を「right」の訳字に当てており  
更にこの「權理通義」を略して「權義」としていた。要するに、  
ここに現れた「權義」は「right」の意味であって、先のように、

「權利及び義務」または「權利或いは義務」の意味ではないことがわかる。以下『學問ノス、メ』『文明論之概略』に現れた「權利」の例を掲げる。

26 凡ソ人トサヘ名アレバ富メルモ貧シキモ強キモ弱キモ人民モ政府モ其權利ニ於テ異ナルナシトノコトハ第二編ニ記セリ（學三編一オ）

27 日本人モ英國人モ等シク天地ノ間ノ人ナレバ互ニ其權利ヲ妨ルノ理ナシ（同一ウ）

28 然ルニ今自國ノ富強ナル勢ヲ以テ貧弱ナル國ヘ無理ヲ加ヘントスルハ所謂力士ガ腕ノ力ヲ以テ病人ノ腕ヲ握リ折ルニ異ナラズ國ノ權利ニ於テ許ス可ラザルコトナリ（同二オ）

29 近クハ我日本國ニテモ今日ノ有様ニテハ西洋諸國ノ富強ニ及バザル所アレドモ一國ノ權利ニ於テハ厘毛ノ輕重アルコトナシ（同二オ）

30 前条ニ云ヘル如ク國ト國トハ同等ナレドモ國中ノ人民ニ獨立ノ氣力ナキトキハ一國獨立ノ權利ヲ伸ルコト能ハズ（同三オ）

31 既ニ日本國ノ誰、英國ノ誰、ト其姓名ノ肩書ニ國ノ名アレバ其國ニ住居シ起居眠食自由自在ナルノ權利アリ（同六オ）

32 既ニ其權利アレバ亦隨テ其職分ナカル可ラズ（同六ウ）

33 第二条 内ニ居テ獨立ノ地位ヲ得ザル者ハ外ニ在テ外國人ニ

接スルトキモ亦獨立ノ權利ヲ伸ルコト能ハズ（同七ウ）

34 他人ノ來リテ我權利ヲ害スルヲ欲セザレバ我モ亦他人ノ權利ヲ妨ク可ラズ（學七編一ウ）

35 右ノ次第ヲ以テ政府タルモノハ人民ノ委任ヲ引受ケ其約束ニ從テ一國ノ人ヲシテ貴賤上下ノ別ナク何レモ其權利ヲ逞フセシメザル可ラズ（同四オ）

36 元來文明トハ人ノ智徳ヲ進メ人々身躬カラ其身ヲ支配シテ世間相交リ相害スルコトモナク害セラル、コトモナク各其權利ヲ達シテ一般ノ安全繁昌ヲ致スヲ云フナリ（同十ウ）

37 余輩ノ聞ク所ニテ人民ノ權利ヲ主張シ正理ヲ唱テ政府ニ迫リ其命ヲ棄テ、終ヲヨクシ世界中ニ對シテ恥ルコトナカル可キ者ハ古來唯一名ノ佐倉宗五郎アルミノ（同十二ウ）

38 斯ノ如ク人タル者ノ分限ヲ誤ラズシテ世ヲ渡ルトキハ人ニ咎メラル、コトモナク天ニ罪セラル、コトモナカル可シコレヲ人間ノ權利ト云フナリ（學八編三オ）

39 右ノ次第ニ由リ人タル者ハ他人ノ權利ヲ妨ゲザレバ自由自在ニ己ガ身體ヲ用ルノ理アリ（同三オ）

40 斯ノ如キハ則チ日本國中ノ人民身躬カラ其身ヲ制スルノ權利ナクシテ却テ他人ヲ制スルノ權利アリ（同四ウ）

41 サレバ此教ノ趣意ハ淫夫ニテモ姦夫ニテモ既ニ己ガ夫ト約束

シタル上ハ如何ナル恥辱ヲ蒙ルモコレニ從ハザルヲ得ズ唯心ニ  
モ思ハヌ顔色ヲ作りテ諫ルノ權義アルノミ (同六ウ)

42 不羈獨立ノ大義ヲ求ルト云ヒ自主自由ノ權義ヲ恢復スルト云  
フニ非スヤ (學十編三ウ)

43 我國士族以上ノ人数千百年ノ旧習ニ慣レテ衣食ノ何物タルヲ  
知ラズ富有ノ由テ來ル所ヲ弁セズ傲然自カラ無為ニ食シテコレ  
ヲ天然ノ權義ト思ヒ其狀恰モ沈湎冒色前後ヲ忘却スル者ノ如シ  
(同八オ)

44 行カント欲スレバ行き、止ラント欲スレバ止マリテ各人其權  
義ヲ異ニスルコトナシ (文一卷六十四オ)

45 抑モ此國ノ獨立セシ由縁ハ其人民敢テ私ヲ營ムニ非ズ敢テ一  
時ノ野心ヲ逞フスルニ非ズ至公至平ノ天理ニ基キ人類ノ權義ヲ  
保護シ天与ノ福祚ヲ全フセンガタメノミ (同七十三ウ)

46 抑モ文明ノ自由ハ他ノ自由ヲ費シテ買フ可キモノニ非ズ諸ノ  
權義ヲ許シ諸ノ利益ヲ得セシメ諸ノ意見ヲ容レ諸ノ力ヲ逞フセ  
シメ彼我平均ノ間ニ存スルノミ (文五卷二オ)

47 此段階ヲ存スルモ交際ニ妨アル可ラズト雖ドモ此有様ノ異ナ  
ルニ從テ兼テ又其權義 (ライト) ヲモ異ニスルモノ多シ (同五  
オ)

48 彼ノ西洋ノ人民ガ自己ノ地位ヲ重ンジ自己ノ身分ヲ貴テ各其

權義ヲ持張スル者ニ比スレバ其間ニ著シキ異別ヲ見ル可シ (同  
三十七オ)

49 上下ノ名分判然トシテ其名分ト共ニ權義ヲモ異ニシ一人トシ  
テ無理ヲ行ハザル者ナシ (同三十七ウ)

50 人民ノ間ニ自家ノ權義ヲ主張スル者ナキハ固ヨリ論ヲ俟タズ  
(同四十二オ)

51 又一方ヨリ農商以下被治者ノ種族ヲ見レバ上流ノ種族ニ對シ  
テ明ニ分界ヲ限リ恰モ別ニ一場ノ下界ヲ開テ人情風俗ヲ殊ニシ  
他ノ制御ヲ蒙リ、他ノ輕侮ヲ受ケ、言フニ称呼ヲ異ニシ坐スル  
ニ席ヲ別ニシ、衣服ニモ制限アリ、法律ニモ異同アリ甚シキハ  
生命ノ權義ヲモ他ニ任スニ至レリ (同六十四オ)

52 故ニ殺人爭利ノ名ハ宗教ノ旨ニ對シテ穢ラハシク教敵タルノ  
名ハ免カレ難シト雖ドモ今ノ文明ノ有様ニ於テハ止ムヲ得ザル  
ノ勢ニテ戰爭ハ獨立國ノ權義ヲ伸バスノ術ニシテ貿易ハ國ノ光  
ヲ放ツノ徵候ト云ハザルヲ得ズ (文六卷十五オ)

53 自國ノ權義ヲ伸バシ自國ノ民ヲ富マシ自國ノ智德ヲ修メ自國  
ノ名譽ヲ耀カサントシテ勉強スル者ヲ報國ノ民ト稱シ其心ヲ名  
ケテ報國心ト云フ (同十五ウ)

54 此國ノ人ト彼國ノ人ト相對シテモ之ヲ同フシ此國ト彼國ト對  
シテモ之ヲ同フシ其有様ノ貧富強弱ニ拘ハラズ權義ハ正シク同

一ナル可シトノ趣意ナリ (同二十三ウ)

55 此他東洋ノ国々及ヒ大洋洲諸島ノ有様ハ如何ン、歐人ノ触ルル処ニテヨク其本国ノ權義ト利益トヲ全フシテ真ノ独立ヲ保ツモノアリヤ (同三十五オ)

56 我日本ニ於ケル外国交際ノ性質ハ理財上ニ論スルモ權義上ニ論スルモ至困至難ノ大事件ニシテ国命貴要ノ部分ヲ犯シタル痼疾ト云フ可シ (同三十六オ)

57 余輩ノ論スル所ニテハ土地ト人民トヲ併セテ之ヲ国ト名ケ其國ノ独立ト云ヒ其國ノ文明ト云フハ其人民相集テ自カラ其國ヲ保護シ自カラ其權義ト面目トヲ全フスルモノヲ指シテ名ヲ下ダスコトナリ (同三十六ウ)

58 若シ或ハ我權義ヲ捐シ我利益ヲ失フコトアラバ其然ル所以ノ源因ハ我ニ求メザル可ラズ自カラ修メズシテ人ニ多ヲ求ルハ理ノ宜キモノニ非ズ (同三十七ウ)

これらの中には、『學問ノス、メ』三編の冒頭の但し書である、(25)以外にも『文明論之概略』の中でも、(47)のように「權義」に“right”を当っている例も見られ、どの例も“right”の意味をとるのが妥当であると思われる。

以上のことから、明治初期に於て「權義」は「權利及び義務」または「權利或いは義務」の意味で、一般的に使われていたとし

ても、福沢諭吉は「權義」を「權理通義」の略語として、“right”の意味で使っている。これは、極く個人的な使い方ではなかったかと思われる。

そこで最初の辞書の意味記述に戻るが、『日本国語大辞典』に『文明論之概略』の一節が例として引用されている。この例は右に掲げた(44)に当るが、この例だけ特に、「權利と義務」の意味で使われていると考えることには無理があると思う。

(注1) 慶応四年『万国公法』及び『西周全集』(宗高書房)には、「礼儀」と記されている。

## 二 「通義」

福沢が『學問ノス、メ』『文明論之概略』で、“right”の訳語に「權義」すなわち「權理通義」を当てたことを示してきたが、『學問ノス、メ』二編には、次のように「通義」を単独で用いた例も見られる。

59 即チ其權理通義トハ人々其命ヲ重ンジ其身代所持ノ物ヲ守リ其面目名誉ヲ大切ニスルノ大義ナリ天ノ人ヲ生ズルヤコレニ体ト心トノ働ヲ与ヘテ人々ヲシテコノ通義ヲ遂ゲシムルノ仕掛ヲ設ケタルモノナレバ何等ノ事アルモ人力ヲ以テコレヲ害ス可ラズ (四ウ)

60 又云ク親ト主人ハ無理ヲ云フモノナド、テ或ハ人ノ権、理、通義ヲモ枉グ可キモノ、ヤウ唱ル者アレドモコハ有様ト通義トヲ取違ヘタル論ナリ（五オ）

この二例を見ると、「通義」は「権理通義」とほぼ同義であるように思われる。『西洋事情』二編卷之一例言の中で、福沢は「通義」を次のように説明している。

61 普天ノ下卒土ノ浜均シク是レ人類ナレハ其天然ノ性情ハ億兆皆同一軌ナリト雖ドモ其国体風俗ニ至テハ則チ然ラス此ノ所輕ヲ彼ニ重シ彼ノ所重ヲ此ニ輕ンスルノ差異ナキニ非ラサレハ彼ノ常言モ我耳ニ新シキコトアリテ洋書ヲ翻訳スルニ臨ミ或ハ妥当ノ訳字ナクシテ訳者ノ困却スルコト常ニ少ナカラズ譬ヘハ訳書中ニ往々自由（原語「リ」通義「イト」）ノ字ヲ用ヒタルコト多シト雖ドモ実ハ是等ノ訳字ヲ以テ原意ヲ尽スニ足ラス就中此篇ノ卷首ニハ専ラ自由通義ノ議論ヲ記シタルモノナレハ特ニ先ツ此二字ノ義ヲ註解シテ訳書ヲ読ム者ノ便覽ニ供スルコト左ノ如シ（二ウ）

62 第二 「ライト」トハ元来正直ノ義ナリ漢人ノ訳ニモ正ノ字ヲ用ヒ或ハ非ノ字ニ反シテ是非ト対用セシモアリ正理ニ從テ人間ノ職分ヲ勤メ邪曲ナキノ趣意ナリ

又此字義ヨリ転シテ求ム可キ理ト云フ義ニ用ルコトアリ漢訳ニ

達義通義等ノ字ヲ用ヒタレドモ詳ニ解シ難シ元来求ム可キ理トハ催促スル筈（ハツ）又ハ求メテモ当然ノコトト云フ義ナリ譬ヘハ至当ノ職分ナクシテ求ム可キノ通義ナシト云フ語アリ即チ己カ身ニ為ス可キ事ヲバ為サズシテ他人ヘ向ヒ求メ催促スル筈ハナシト云フ義ナリ

又事ヲ為ス可キ權ト云フ義アリ即チ罪人ヲ取押ルハ市中廻方（マヘリカダ）ノ權ナリ

又当然ニ所持スル筈ノコトト云フ義アリ即チ私有ノ通義ト云ヘハ私有ノ物ヲ所持スル筈ノ通義ト云フコトナリ理外ノ物ニ対シテハ我通義ナシトハ道理ニ叶ハヌ物ヲ取ル筈ハナシト云フ義ナリ人生ノ自由ハ其通義ナリトハ人ハ生ナガラ獨立不羈ニシテ束縛ヲ被ルノ由縁ナク自由自在ナル可キ筈ノ道理ヲ持ツト云フコトナリ（五オ）

『西洋事情』では、福沢は“right”の訳語に「通義」を当てている。（なお「権理通義」「権義」の例は見られない。）

では、辞書に「通義」はどう訳せられているか。

63 『諸橋大漢和辞典』

天下一般に通ずる不変の義理。世間どこにも通用する道理。通義。通則。〔孟子、滕文公上〕或勞力、或勞心者治人、勞力者治於人、者食於人、天下之通義也。〔荀子、臣

道」不<sub>レ</sub>卹<sub>二</sub>公道通義<sub>一</sub>。〔史記、宋微子世家〕天下通義也。

〔漢書、劉向伝〕和氣致<sub>レ</sub>祥、乘氣致<sub>レ</sub>異、祥多者其国安、異衆者其国危、天地之常經、古今之通義也。〔孔叢子、論者〕冠而後娶、古今之通義也。

#### 64 『日本国語大辞典』

世間一般に通用する道理。広く一般に通じる普遍的な原理。\*書言字考節用集一八「通義<sub>フツギ</sub>」\*公議所日誌三

・明治二年三月「國家に貢獻有は、住民の通義なるに」\*  
學問のすゝめ<sub>ハ</sub>福沢諭吉<sub>ノ</sub>二・人は同等なる事「但し其同等とは有様の等しきを云ふに非ず、権理通義の等しきを云ふなり」\*孟子<sub>一</sub>滕文公上「治<sub>二</sub>於人<sub>一</sub>者食<sub>レ</sub>人、治<sub>レ</sub>人者<sub>二</sub>於人<sub>一</sub>、天下之通義也」

#### 65 『広辞苑・第二段』

世間一般に通ずる道理や意義。

つまり、「right」の訳語としての意味を記載している辞書はなく、しかも『日本国語大辞典』では、「権理通義」の部分为例に引用している。福沢がはじめ「right」の訳語に、「道理」「原理」などの意味を持つ「通義」を選んだことには、それなりの意味があるが、また(61)で、「実ハ是等ノ訳字ヲ以テ原意ヲ尽スニ足ラス」と述べたとおり、「通義」という訳語に満足していなかったこ

ともわかる。したがって『日本国語大辞典』のように、福沢の用例を、「通義」の意味が「道理」「原理」であると述べた箇所の実例として引用することには、疑問がある。「権理通義」を一つの四字漢語として扱うべきであって、この場合、「通義」を「権理」と分けて意味を考えることはできない。

次に、『明六雑誌』に見られる「通義」の用例を掲げる。

66 故ニ譬ヘバ人妻姦ノ如キモ夫ノ告ルヲ俟テ始テ之ヲ刑典ニ附ス是万国ノ通義ナリ(津田真道二十号一ウ)

67 如此ニシテ僧徒ノ叛服ヲ一層堅実ニシ又他国ノ臣民及ヒ高官ニ在ル者ヲシテ半ハ之カ臣隷タラシムルニ至ル豈之ヲ世交ノ通義ヲ破リ政法ノ基礎ヲ動カスト云ハサルヘケンヤ(柴田六号八ウ)

68 各人通義(柴田六号九オ)

69 是ニ由テ世交ニ混入スト雖決シテ此情義ヲ放チ得可ラス又之ヲ行フニ緊要ナル自由ヲ失フ可ラス是レ本然侵シ難キノ通義ナリ(柴田六号九オ)

70 若シ国宗ニ異ナル宗教ヲ信スル人民其数甚タ多カラス然モ政府之ヲ国内ニ許シ置クヲ不可ト為ス時ハ其異宗人民各其所有ノ土地ヲ買却シ家族ト共ニ其国ヲ去リ又総テ其家産ヲ携去スルノ通義ヲ有スヘシ(柴田六号九オ)



71 又曰ク先其通義権理ヲ保護セシメ自尊自重天下ト憂樂ヲ共ニ

スルノ氣象ヲ起サシムト (西周三号十オ)

右六例のうち、(66)の津田真道の用例は「道理」「原理」の意味であり、(67)・(70)の柴田の用例では、(67)(69)は「道理」「原理」と置き換え得るが、(68)(70)はむしろ“right”の意味であると思われる。また、(71)は西周が、民撰議院の建言書の一部を引用したもので、これもまた「通義権理」という四字漢語が“right”に当たると考えられる。

このように見てくると、一時的な動きにもせよ、「通義」を、“right”の訳語として用いた知識人が、福沢一人ならずいたということが言えると思う。

また、小稿では「権利」と「権理」の違いについての詳論は省いたが、当時何人かの知識人は、この二つの語を区別して使っており、それぞれの意味は、「権利」は法律に代表される規則などによって定められ、保護される力であり、「権理」は生れながらに備わっている、自然の力であると考えられる。

(注2) 『明六雑誌』にも柴田とのみ記してあり、名は不明。

(注3) 明治七年一月十八日(日曜日)に、『日新真事誌』に発表した、副島種臣はじめ八名による建言書。東京大学法学部明治文庫蔵。

## おわりに

今ここで述べた「権義」「通義」はいずれも、現在ではほとんど使われていない言葉である。また、現代の辞書に記載されていない意味は、記載されている意味に比べて、より一時的、個人的な使い方であったと思う。しかし、伊藤正雄氏が『福沢諭吉論考』(吉川弘文館 昭和四十四年十月刊)の中で、「私はかねて感じてゐるのですが、今となつては明治時代はすでに一つの古典の時代であるから、明治時代のことばの辞書が必要なのではないか。特に今申した幕末から明治時代へかけての言語の大動揺期のことばの字引、いはば文明・開化語辞典とでもいふやふなものが出来なければならぬのではないかと思ふのであります」(五十八頁、傍点は著者自身のもの)と言っておられることに、切に同感せざるを得ない。

明治のことばを調べるためには、当時の英和辞書の類が非常に役に立つが、いつまでもこれに頼っているだけで良いのだろうか。参考までに最後に英和辞書の“right”の項目に訳語として、「権義」「通義」が現れているかどうかを表で示す。

年 代	辞 書 名	権義通義	備 考
慶 三年 (一八七〇)	和英語林集成	×	初版
明 二年 (一八六九)	和訳英辞林	×	薩摩辞書
五年 (一八七二)	和英語林集成	×	再版
六年 (一八七三)	附音 和英語林集成	×	
一二年 (一八七九)	附音 英華和訳字典	×	中村敬字校正
一五年 (一八八二)	増補 英和字典	○	二版
一六年 (一八八三)	増訂 英華字典	×	井上啓次郎訂増
一七年 (一八八四)	哲学字典	○	
一九年 (一八八六)	和英語林集成	×	三版
二十年 (一八八七)	附音 和訳英字典	×	
二五年 (一九〇二)	雙英和大辞典	○	
二八年 (一九〇五)	再訂 和訳英字典	○	

調査文献

『明六雜誌』明六社、明治七年二月—八年十一月。国立国会図書

館蔵、但し、複製版（立体社、昭和五十一年十月）

を使用。

『百一新論』西周、明治四年。東京女子大学蔵。

『学問ノス、メ』福沢諭吉、明治六年四月—七年七月。東京女子

大学蔵、但し第十編は慶応大学蔵のものの使用。

『文明論之概略』福沢諭吉、明治八年。東京女子大学蔵。

『西洋事情』福沢諭吉、慶応二年—明治二年。東京女子大学蔵。

（昭和五十三 日文卒）